

公現後第4主日礼拝説教「神の家は祈りの家」予稿

日本基督教団石神井教会 2025年2月2日

【旧約聖書日課】創世記 28章10～22節

¹⁰ヤコブはベエル・シェバを立ててハランへ向かった。¹¹とある場所に來たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。¹²すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。

¹³見よ、主が傍らに立って言われた。

「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。¹⁴あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。¹⁵見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

¹⁶ヤコブは眠りから覚めて言った。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」

¹⁷そして、恐れおののいて言った。

「ここは、なんと恐れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」

¹⁸ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、¹⁹その場所をベテル（神の家）と名付けた。ちなみに、その町の名はかつてルズと呼ばれていた。

²⁰ヤコブはまた、誓願を立てて言った。

「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、²¹無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、²²わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。」

【使徒書日課】使徒言行録 7章44～50節

⁴⁴わたしたちの先祖には、荒れ野に証しの幕屋がありました。これは、見たままの形に造るようにとモーセに言われた方のお命じになったとおりのものでした。⁴⁵この幕屋は、それを受け継いだ先祖たちが、ヨシュアに導かれ、目の前から神が追い払ってくださった異邦人の土地を占領するとき、運び込んだもので、ダビデの時代までそこにありました。⁴⁶ダビデは神の御心に適い、ヤコブの家のために神の住まいが欲しいと願っていましたが、⁴⁷神のために家を建てたのはソロモンでした。⁴⁸けれども、いと高き方は人の手で造ったようなものにはお住みになりません。これは、預言者も言っているとおりです。

⁴⁹『主は言われる。

「天はわたしの王座、

地はわたしの足台。

お前たちは、わたしに

どんな家を建ててくれると言うのか。

わたしの憩う場所はどこにあるのか。

50 これらはすべて、

わたしの手が造ったものではないか。」』

【福音書日課】 マタイによる福音書 21章12～16節

¹²それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、
両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。¹³そして言われた。「こう書いてある。

『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』

ところが、あなたたちは

それを強盗の巣にしている。」』

¹⁴境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々をいやされた。¹⁵他方、祭司長たちや、律法学者たちは、イエスがなされた不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで、「ダビデの子にホサナ」と言うのを聞いて腹を立て、¹⁶イエスに言った。「子供たちが何と言っているか、聞こえるか。」イエスは言われた。「聞こえる。あなたたちこそ、『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉はまだ読んだことがないのか。」』

夢を見て【こども説教のために】

主イエスは、毎週の安息日に町や村の会堂で行われる礼拝においでになるだけではなく、大きな祭りのときにはエルサレムの神殿に行かれて礼拝をなさることもあったようです。会堂では、集まった人たちが聖書を読み、祈りと讃美をささげます。神殿では、祭司に犠牲をささげてもらうために、人々は犠牲の動物を買い求めたり、特別な献金をしたりしました。ですから、神殿の境内は、動物の売り買いをする人たちや、献金のための両替をする人たちで賑わっていたのです。ささげる動物を飼うことができない人や献金を用意できない人には、神殿は少しばかり居心地が悪かったようです。その様子をご覧になった主イエスは、境内で売り買いをしている人たちを追い出してしまわれたことがありました。「ここは祈りの家と呼ばれるべきです」と。

主イエスは、昔の族長ヤコブのことを思い出していたかもしれません。ヤコブは、一人旅をして野営をしていたとき、夢を見たのです。天と地を結ぶ階段（はしご）があって、御使いたちが昇り降りしていました。そして、御声を聞いたのです。主の御声、神の御声です。ヤコブは、眠りから覚めると、そこに神がいらっしゃったと知り、そこを「ベテル（神の家）」と呼びました。そこは、ヤコブが初めて、神がいらっしゃることを知った場所だったのです。畏れ多い、けれども特別な祈りの場所となったのです。

主がこの場所に

讃美歌の中には、葬儀などで歌われることが多いために普通の礼拝では避けられがちなものがあります。讃美歌「主よ、みもとに」もそのような一曲かもしれません。創世記 28 章「ヤコブの梯子」の箇所を歌った讃美歌です。もともとの文脈からすれば、神との出会いの体験を歌うものですから、葬儀讃美歌ではありません。ヤコブは、天と地を結ぶ梯子とそこを上り下りする御使いたちの様子を夢で見て、思わず「**ここは天の門だ**」と言いましたが、そこから天に上って行くことをしたわけではないのです。

雲の合間から光の筋が差し込む様子を指して、「ヤコブの梯子」と呼ぶことがあります。気象用語では「薄明光線」と呼ぶそうです。一筋の強い光線になると、あたかも天と地を結ぶ通路のように見えます。ヤコブが見たのは、そのような自然現象だったのでしょうか。夢うつつの中、そこを御使いらが上り下りしているように思ったのでしょうか。

青年時代、寝る間も惜しんで生活していた頃、日曜日の礼拝中、静かに着席している時間は、睡魔との戦いの時間でした。母教会は、壁面の窓は少なく、居眠りするには心地よい薄暗さなのです。天窗と照明で照らされた聖壇の牧師を見つめているうちに、いつの間にか眠りに堕ちて行きます。それでも、説教を語る牧師の声は聞こえているような気がしているのです。聞いているつもりなのです。そうして深い眠りに堕ちても、必ず眠りから覚めるときが来ます。説教を終えた牧師が祈り始めるときです。不思議なことに、祈りになると目覚めるのです。口調が変わるからでしょうか。祈りに合流できて安心したわたしは、続く讃美歌を心晴れやかに歌うことができる。それが、青年時代の礼拝生活でした。牧師や先輩信者の方に、そのような礼拝生活を咎められることは、一度もありませんでした。

そのわたしに、眠りの礼拝生活から目覚めさせられたように思わされた日が訪れたのです。奉仕していた教会学校の礼拝で、子どもたちと共に牧師の語る説教を聞いていたときのことです。さすがに子どもたちの横では居眠りをすることはありませんでしたが、いつも居眠り同然に聞き流していた牧師の言葉が、突然、わたしの心を捉えたように思われたのです。いいえ、わたしの心を捉えたのは、牧師の言葉ではなく、その日語られていた聖書の御言葉でした。「**まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった**」とは、まさにそのときわたしが感じたことでした。

天窗から聖壇に射し込む光を見るたびに、わたしは、そのときのことを思い起こします。母教会ではない教会の礼拝堂であっても、「**ここは、なんと畏れ多い場所だろう**」と思わずにいられなくなります。ここを「神の家」として整える働きに仕え、皆さんをお迎えできるのは、大きな幸いなのです。

《祈りの家》

主イエスが、神殿の境内で売り買いしている人々を追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒して回られたのは、決して褒められたことではなかったでしょう。それでも、やむにやまれぬ思いで、主イエスはそうなさったのです。そうなさって、「わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである」と預言者イザヤの預言（イザヤ 56:7）を示された主イエスの姿を、弟子たちは忘れることがありませんでした。この件で主イエスが裁判に訴えられても、弟子たちは、この出来事を封印してしまうことなく、語り継いだのです。

神殿、神のために建てられた家、神の家は、祈りの家と呼ばれる。主イエスは、そこが祈りに満ちた場所になることを願われたのかもしれませんが。エルサレムの神殿は、当時、世界各地から参詣にやってくるユダヤ人たちはもちろん、物見遊山でやってくる外国人たちも少なくなく、人々でごった返しており、落ち着いて礼拝をすどころではなかったとも言われます。祭りの際には、なおさらであったでしょう。心を清めて神の御前に進み出、静かに祈りをささげる場として、神殿を取り戻したいと願ったのは、主イエスだけではなかったはずです。

ところで、福音書は、このときの境内で起こったことを、こう伝えていきます。「目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこの人々をいやされた」。売り買いをしている人たちが追い出され、両替人や商売人の台がひっくり返された後、そこには、癒しを求める人々の姿があった、というのです。主イエスは、その人たちと共にいた、というのです。神の家は、この人たちのためにある。祈りの家とは、この人たちのいる場所のことである。主イエスは、もしかすると、そうお教えなのではないでしょうか。

日曜日の教会に招かれて来られた皆さんは、ここで礼拝に加わられることを通して、癒されたいです。リラックスして、身も心も休ませていただきたいです。神の御前に進み出てこられたからこそ、そうしていただきたいです。居眠りして、夢を見ているようでは、神に失礼でしょうか。けれども、神の御前で緊張しすぎて、目を上げて御顔を見ることもできず、心を開いて御声を聞くこともできないならば、本末転倒です。神は、わたしたちに御心を悟らせようとして、御言葉をお語りくださっているのです。お招きくださっているのです。御前にお導きくださるために、主イエスをお遣わしくださったのです。主イエスのもとの、わたしたちは、まず癒されるのです。身も心も休ませ、ヤコブのように夢見る者としていただくのです。そこに、主はいらっしゃるのです。「まことに主がこの場所におられる」と、眠りから目覚めたとき、わたしたちは悟らせていただくのです。